THE FEELER IN THE TOWN

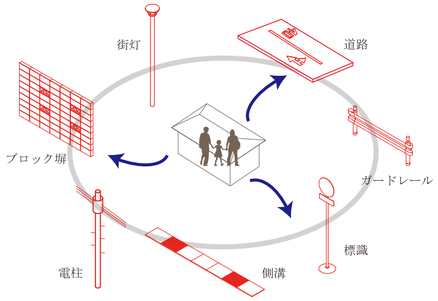
単なる帰り道が冒険のように思えていたあの頃。道路いっぱいにチョークで絵を描く、ガードレールに紐をつなぎ縄跳びをする、標識にぶら下がる。街に溢れる「インフラ」に対して、もっと身近に感じられていたように思える。身体だけでなく心も成長するにしたがって、汚れるから、みっともないから、誰かの邪魔になるから、とただ道を真っ直ぐに歩くようになった。

いつしか大人に怒られたり、周りに注意されたことが大きな要因だろうか。それは「まち」に触れる機会が減少したともいえる。勝手に道路に線を引いて自分の「陣地」とできると思っていた感覚、地面を靴のかかとで削り「範囲」を設定した傲慢さを設計に発展させることができないか、と考えた。これらを生活や建築に落とし込む提案を行う。
勝手に「触ってはいけない」と認識しているものに対する距離を近づけることが、「まちや他者に対する距離」を縮める。

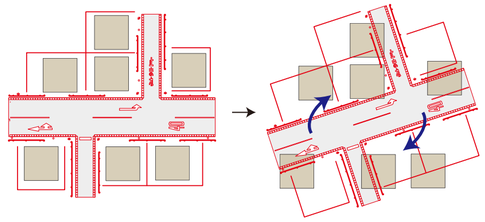
関東圏の住宅街を敷地として設定し、集合住宅を提案する。
子供のいる家族と二世帯住宅を想定し、一住居内はまちに触れることができるように組み込み、住居同士は「インフラ」によって関係付けられる。

また、ここで暮らす人々は、家から出た後も、街に溢れるそれぞれの街の特色に目がいくように、街に触れることができるようになることだろう。

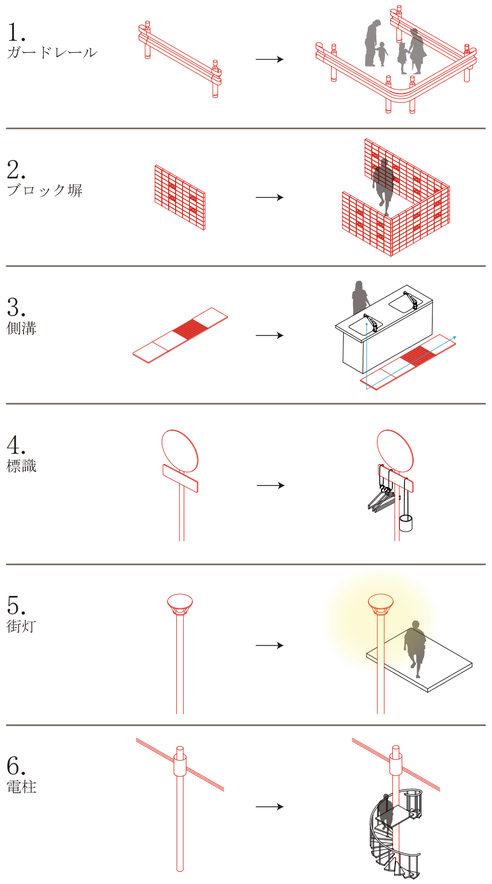
インフラに”触れる” － 自己領域の拡張



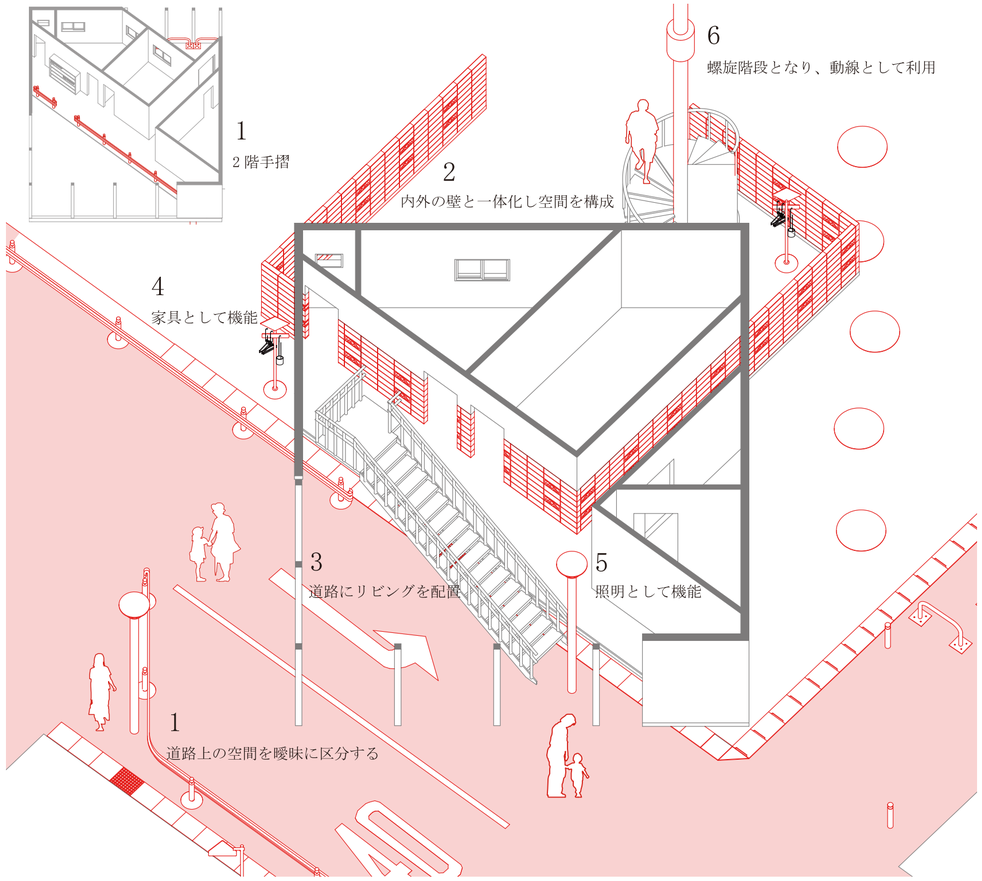
インフラに”触れられる” － 価値基準をズラす



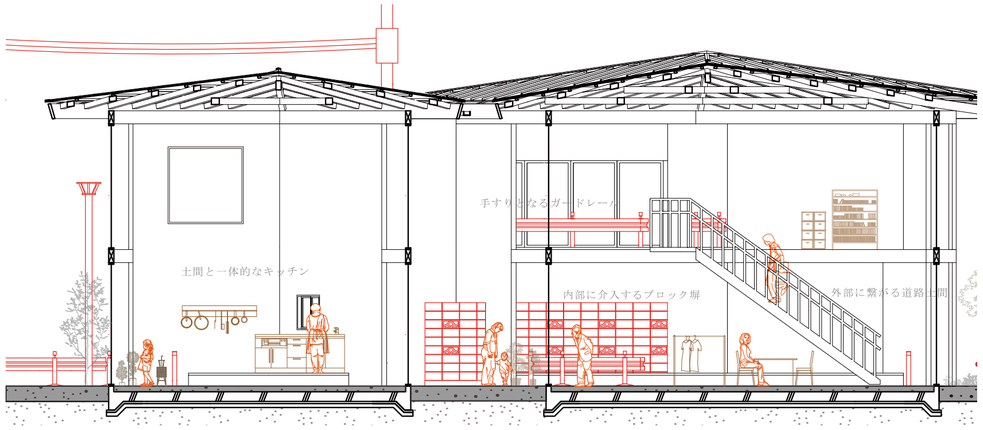
ダイアグラム

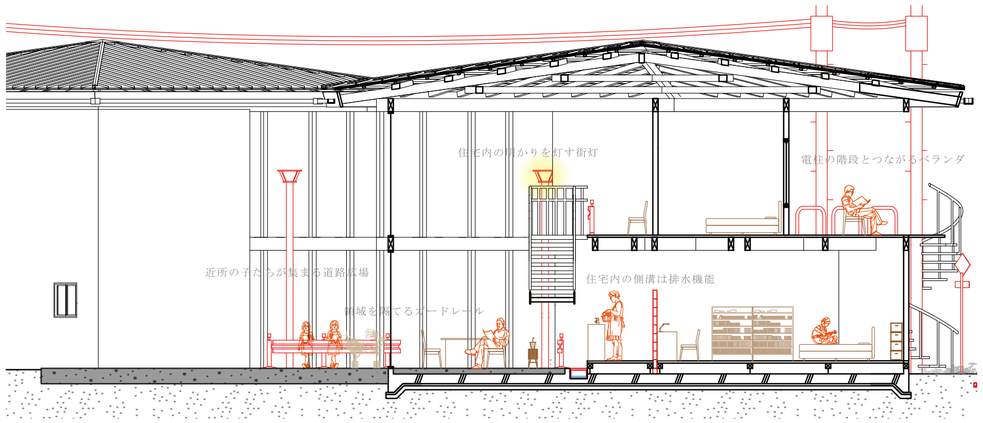


アクソメ図



断面図 1:100





道路が入り込んだ住まい

家族の生活感は道路土間に溢れ出す

放課後、お母さんが帰ってくるまで道路にお絵かき

就寝後、街灯に明かりが住戸内を灯す